

白煙と悪臭のモスクワ旅行

中谷 征司 （1962 年卒）

サンクトペテルブルグとモスクワ 8 日間の旅を終え、8 月 7 日帰国したが、その夜のテレビ放送や翌日の新聞に、「モスクワ渡航自粛を！ 火災拡大、スモッグ最悪」のニュースがあり、また複数の友人からモスクワから無事帰国したか安否を問うメールが届いており、飛行機が大幅に遅れたとはいえ一応予定日どおり帰国出来たことを幸運と思うべきかもしれないと改めて認識した。日本の暑さを逃れる望みは見事に破れ、どちらかというところ好ましくないタイミングでの旅となったロシア訪問の一端を以下にご紹介する。



写真1 エカテリーナ夏の宮殿の噴水

1. ロマノフ王朝の栄華を残すサンクトペテルブルグ

旅行の前半訪問した、ロシア北方の都サンクトペテルブルグ（ソ連時代の名前はレニングラード）は、7 月後半に 40 度に達する百何十年振りかの気温に苦しんだ

らしいが、我々の到着時は35度前後。 平年より10度以上高く、エアコン、冷蔵庫もなく、首を振らない小さな扇風機が1つだけのホテルには困惑したものの、ロマノフ王朝の栄華をそのままに、エカテリーナ女帝時代の宮殿、教会などの世界遺産や、旧宮殿を使ったエルミタージュ美術館のあきれるばかりの広さなど、ロシアの良さを堪能できる日々となった。 第2次大戦中やスターリン圧政時代、特に教会などは



写真2 昼間なのに暗い太陽

宿舎や倉庫、射撃練習場に使われるなど苦難の連続であつたらしいが、わずか100年足らずの間に、一度ならず二度までも、自分たち民族の遺産に対する評価を大きく変えざるをえなかったロシア民族の心情はどんなものなのだろうかと思ひめぐらす一時であつた。

2. 白煙・悪臭のモスクワ



写真3 マスクをするクレムリン観光客

サンクトペテルブルグ観光中も、南部のモスクワが40度の高温、ホテルにはエアコンなしという情報あり、戦々恐々としてモスクワ入りしたが、幸いにして気温は低下傾向にあり、せいぜい35度、ホテルにはエアコン、冷蔵庫が完備しており一安心した。

ただ驚いたのはあたり一面白い煙と異臭。 遠くの建物は殆どかすんで見えないことであった。 記録的な猛暑に誘発されて、500カ所を超す山林火災が続いており、消火活動も思うに任せないとのこと、ロシアという国の力は案外弱体なのかと思ったが、帰国後の情報では泥炭層が猛暑で燃えているとのこと。 同情するとともに、人間が自然を冒瀆しすぎたしっぺ返しかもという同行仲間の意見は、あながち間違いとは言えないと思った。



写真4 赤の広場 煙るレーニン廟

9日、ロシア気象庁は、この1千年来初めての猛暑であると発表した。 中央政府は非常事態宣言を出して躍起になっているようだが、文字通りのもぐらたたき、スモッグはサンクトペテルブルクや東方ウラル地方にも広がっていくと予想されており、今後穀物減収、家畜の餌不足など、世界経済にも悪影響を及ぼすことは確実だと思われる。

一方、隣国中国の南部やインドでは大雨や土石流の被害で多数の死者がでているとのこと、気象学者によればユーラシア大陸に吹く偏西風の蛇行が例年より大きいため、猛暑地域が大きく北方に広がっているのが原因だとか。 たかが偏西風の通路が少し変わっただけでこれだけの異常気象になるとは！ 逆に言えば、我々地球人はなんと微妙な環境バランスの上で生活してきたことか、驚かざるを得ない。

気象に関する限り、「異常」が「異常」とは言えない時代に入っているのではあ



写真5 モスクワ郊外、山からの煙に包まれる農家

う。これからは自然と人智の競い合いが続くような気がするが、毎年首相が代わり、1年先の情勢も読めない低劣な議会民主主義しか運営出来ない我が国が、この変動の時代を乗り切っていけるのか不安を持たざるを得ないのである。

(つづく)

—— 京機短信への寄稿、宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail: jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。宜しくお願い致します。



学会名称： ICSV (International Congress of Sound and Vibration) 17
 開催地： エジプト、カイロ
 会場： Intercontinental City Stars Cairo
 期日： 7 月 19~22 日
 参加者： 臼井智哉（振動工学研究室 修士 2 回）、
 松久寛教授、宇津野秀夫准教授

ICSV 17 は IIAV (International Institute of Acoustics and Vibration) により年に 1 回開催される、音響と振動に関する国際学会である。アジア、西欧を中心として世界各国から建築、電気、機械工学の中で音響・振動に携わる多くの研究者が集まるものであった。学会データによると、日本からの出展数は韓国、中国に続く 3 番目で、数字からアジア勢がこの分野において一定の立ち位置を築いていることが分かる。

私、臼井は "Three-Dimensional Semi-Active Vibration Controller/ Isolator" と題して論文提出及び発表を行なった。これは従来の免震台では劣るとされていた制振性能を向上させた、いわば免震制振台に関する研究である。発表はプレゼンテーション 15 分、質疑応答 3 分と事前に定められていたが速まる鼓動に合わせて口調も速くなっていたのか発表が短くなり質疑応答に多くの時間を割くこととなった。

所感： 先述の通り、学会には韓国・中国・日本の 3 カ国から非常に多くの研究者が参加していた。しかしながら、発表を聞いていてこの 3 カ国の発表者は全体のレベルに比して特に英語力に劣る感が否めなかった。言葉は同じ土俵で戦うための最低限のツールであり、そこが一定のレベルに達しなければ他国の研究者からは見向きされずに終わってしまう危険性を感じた。

私自身も他国の学生の幾人かが質疑応答で積極的に質問する姿と比較して、他人の発表を理解し議論を行うには到底及ばないレベルであると痛感させられ、英語力を

より一層向上させる必要があると感じた。さらに、感じたことの 하나가、多くの研究者が学会の本来の意義である、他人と知識の共有することで自分の研究に新たな道筋を導きだす、或いは研究活動を円滑化させるための人脈の構築を高い次元で意識しているらしいということである。休憩時間には積極的に他人に話しかけ、限られた時間を有効に使っていた。いまや海外を相手にすることが必要不可欠になっている社会において、そういった姿勢は研究者のみならずいかなる立場の人間にも求められる資質として見習うべきであると考えます。 外の世界に出なくてはどのように身に沁みて感じ取ることもなかったのではないだろうか。

最後に、今回の ICSV 17 参加にあたり、脇坂基金運営委員会より 10 万円もの資金援助を賜ったことが大きな後押しとなりました。 今後はこの経験を活かし、国際的視野を持ったエンジニアとなるべく努力して参る所存でございます。 このような援助をして下さった脇坂知行様、及び運営委員会の皆様に心より御礼申し上げます。 ありがとうございました。



発表を行う筆者

学年評議員

本年度の学年評議員が次のように決まりました。各学年同窓生の情報や同窓会の開催に中心的に動いて頂ける方です。何卒宜しくお願い申し上げます。

連絡方法は個人情報保護の観点から、個々に載せる事は出来ませんので、別添資料としてお送りしております。不明な折りは、京機会事務局にお問い合わせ下さい。

平成２２年度学年評議員一覧

卒業学年	氏 名	卒業学年	氏 名	卒業学年	氏 名
1945	谷口 浩	1966	中嶋 邦彦	1988	玉川 雅章
1946		1967	藤川 卓爾	1989	石谷 善博
1947	岸本 雅夫	1968	来田 浩毅	1990	琵琶 志朗
1948	岐美 格	1969	並木 宏徳	1991	高橋 俊雄
1949		1970	各務 嘉郎	1992	須山 徹
1950	野木 圭三	1971	三津田恒夫	1993	岩井 裕
1951	吉川 和彌	1972	秋山 雅義	1994	茨木 創一
1952	山本 巖	1973	増本 雄治	1995	小森 雅晴
1953旧	乾 宰人	1974	荒川 善久	1996	泉井 一浩
1953	西田 弘	1975	塩路 昌宏	1997	佐野 智一
1954	岡崎 順応	1976	杉江 俊治	1998	浦木 亨弘
1955	田中 道七	1977	中井 善一	1999	藤本 亮
1956	橋本 昌	1978	上原 一浩	2000	小田 豊
1957	坂戸 瑞根	1979	坂口 保彦	2001	土井謙太郎
1958	野田 忠吉	1980	小寺 秀俊	2002	金田 靖弘
1959	柴田 俊忍	1981	榎木 哲夫	2003	吉富 聡
1960	矢部 寛	1982	上井圭一郎	2004	中安 祐貴
1961	井上 恵太	1983	永瀬 豊	2005	向 朋作朗
1962	吉岡 肇	1984	横小路泰義	2006	中務 陽介
1963	中川 哲	1985	田坂 誠均	2007	北川 優太
1964	垣野 義昭	1986	蓮尾 昌裕	2008	鯨岡 絵里
1965	能勢 博司	1987	川上 浩司	2009	松本 洋平

野次馬話 第5話 「教書」

S43卒 遠藤照男

米大統領が一般教書を発表し・・・などのニュースが流される。何のことはない、単なる メッセージでないか。辞書を引いてみた。大日本国語辞典ではくけうしょ>、新明解国語辞典その他はくきょ うしょ>で引くが、意味するところは、①将軍・諸侯の発する命令書が本来の意味で、転じて②大統領の発する論告書、教皇の布告にも使われるようになったとみる。

教書とはは本来命令書・布告であるから、president's message が 論告や字面通りのメッセージを発していることに「教書」を適するのは妥当ではない。

京機・京都の会 第48回例会のご案内

日時：2010年 9月4日(土) 11時00分～13時30分

場所：ウエスティン都ホテル（京都）西館3階 蘭の間

(Tel 075-771-7111、担当；岡本圭史様)

話 題：

(1) 初めてご出席の方の3分間スピーチ

(自己紹介、仕事、思い出、趣味、生活の工夫などご随意に)

(2) 話題提供(40分)

話題提供者： 柴田 俊忍 氏 (S34卒)

「アンコール遺跡群訪問の印象」

カンボディアのアンコール遺跡13箇所を半年前に訪問しました。その時の印象をお話し、ご批判を頂く予定です。

(3) 全員懇談

(4) その他

会費： 5,000 円

幹事： 森 惇暢 Tel：075-741-2836

藤尾 博重 Tel：0742-45-1932

***** 回答蘭 *****

第48回京機・京都の会

日 時 2010年 9月4日(土) 11時00分～13時30分

出欠回答 ご出席 ご欠席

ご芳名：

御住所：(変更の無い場合は必要ありません)

お電話：(変更の無い場合は必要ありません)

出欠の返事は8月27日(金)までに必着でお願いいたします。

関西支部 京機サロン「文楽」報告

平成22年7月31日(土) 17:00-21:00

大阪日本橋 国立文楽劇場

京機サロン「文楽」も回を重ねて何回目かを意識せず、恒例の夏の催しとなった。今年は、例年と違って懇親会で一献傾けてから、サマーレイトショーで古典演目を鑑賞する企画を立てて戴いた。毎回、幹事さんのお世話には深く感謝する。ビールで高揚した気分で鑑賞したのは、有名な「菅原伝授手習鑑」の「寺入り・寺子屋の段」約1時間半、休憩を挟んで「日本振袖初」約40分である。後者は聞き慣れない外題だが、素戔鳴尊の大蛇退治の話である。両方とも話の筋は良く知ったことなので、気楽に楽しむことができた。



わが子を身代わりに差し出した松王丸

常連の夫婦連に毎回新しい参加者が加わって、久闊を叙して楽しく語り合う良い機会として、すっかり定着した感じである。工学部の同窓会としてこのような文化的なレベルの高い定例会合が、ながく続いていることは誇れることではなかろうかといつも思っている。発案者の見識に感謝したい。

「寺子屋の段」は日本人の心情の一つとして、いろんなところで議論されてきているから、話の内容を筋を追って説明するまでもなかろう。「せまじきものは宮仕え」、「梅は飛び桜は枯るる世の中に何とて松のつれなかるらん」などの科白は良く知られている。豊竹つばさ太夫・野澤喜一郎、竹本綱太夫・鶴澤清二郎、竹本津駒太夫・



鶴澤寛治、のベテランがそれぞれのパートをじっくりと聴かせていただいた。 ちょうどその週の日本経済新聞の夕刊で、月曜日から金曜日までの「人間発見」に、文楽三味線 鶴澤寛治さんが思い出話を連載されており、木曜日には、父の代役で若いときに「寺子屋の段」を、ドキドキしながらなんとか勤めて、自信になったと話されているのを読んだ。最後の松王丸が再登場して、事情を語るところの三味線を弾かれたが、これを思い出しながら、一際深く感じて聴かせていただいた。

「大蛇退治の段」は、舞台の動きを楽しんだ。 大蛇の精である岩長姫を遣われた桐竹勘十郎師の活躍は華々しく、甕に仕掛けられた毒酒を飲んで、だんだんと身体にまわってゆく様子を、衣装を何度も取替え、首まで2度も取り替えて、熱演された。これは近松門左衛門の原作を補綴し、久しぶりに上演されたものと解説されていた。舞台の動きの華やかさと、4人の太夫、5人の三味線に、鼓や笛も加わって、まさに夏の夜にふさわしいファンタジーとなった。

(小浜弘幸 昭和32、河本研)

家内の誕生日に結婚30年目にして初めて二人で文楽を鑑賞しました。 演目二題共に、設定等を今流に焼き直すと、結構現代に当てはまる場面も多いかもしれない、と思いつつ、男性の力で奏でられる音楽の力強さと独特の間に耳を傾け、人形遣いに見入っておりました。

公演に先立つ食事会では、父・兵衛をご存じの先輩の方々から親しく声を掛けて頂き、温かい会となりました。 先輩諸兄へのご紹介の労をさりげなく取って下さった方の御配慮に感謝します。 家内共々満足した贅沢な一夜でした。

昭和47年(1972年)卒 秋山雅義



勢竜天満宮は灰屋川を渡った鳥居の奥にあります。

歌舞伎や浄瑠璃の三大名作といわれる「菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）」の寺子屋の跡と伝わる場所が京都市右京区京北の芹生（せりょう）にあります。市内からは、貴船の北標高700mの芹生峠を越えて漸くたどり着く秘境です。物語は実は江戸中期の創作で、菅秀才や源蔵らは実在しないといわれますが、芹生には「寺子屋の跡」と伝わる場所があり、そこには1943年（昭和18年）建立といわれる勢竜天満宮まであります。芹生にあった分校の教員が尽力し、松竹創業者・白井松次郎や初代中村吉右衛門の協力も得て建てられたといえますから、今でいう村おこしでしょう。それらの人々の努力も空しく、現在の芹生は8軒の民家が残るだけになっているそうですから、近い内に廃村になってしまうのかもしれませんが。しかし武部源蔵の「すまじきことは宮仕え」という名セリフと、肉親をも失うことになる松王丸の忠義、そうした尋常でない土壌に対する賛美と批判が複雑に交錯する、この名作の舞台としての記憶は残ることでしょう。

昭和44年卒 並木宏徳

INFO

● 詳細はPDF版でご覧下さい。

1. 「クラウド・コンピューティングと日本の競争力に関する研究会 報告書(案)」に対する意見公募要領

<http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=PCMMSTDETAIL&id=595210017&Mode=0>
<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000065585>

平成22年6月22日 商務情報政策局情報処理振興課

1. 意見公募の趣旨・目的・背景

情報技術はこの数年間で劇的な進化を見せ、社会基盤としての重要性が日々高まっています。2009年末に閣議決定された「新成長戦略の基本方針」においても、改めて「IT立国・日本」が謳われています。IT産業の競争力強化とIT利活用による産業の高度化を実現し、経済成長を支えるとともに、国民生活全般にわたる質の向上を図ることは、わが国にとって重要な課題です。とりわけ、クラウド・コンピューティングは、IT業界のみならず、農業や商業など、様々な業界からその普及、発展が期待されています。政府として、クラウド・コンピューティングの推進に向け、データ利活用による新サービス・新産業の創出支援、関連制度の見直しを

含めたルール整備、技術開発・標準化支援などに取り組んでいく必要があると認識しています。

こうした現状を受け、経済産業省では、「クラウド・コンピューティングと日本の競争力に関する研究会」を開催し、「ITにより国民生活全般にわたる質の向上を図る」という目的の達成に向け、クラウド・コンピューティングを活用した理想的な将来ビジョンを展望すると共に、ビジョンの実現に向けて解決すべき課題を洗い出し、その解決策を模索してきました。この度、その内容がまとまったことから、報告書（案）の公表を行うこととしました。

クラウド・コンピューティングと日本の競争力に関する研究会 報告書(案)

<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000065581>

クラウド・コンピューティングと日本の競争力に関する研究会 報告書(案) 概要

<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000065582>

クラウド・サービス・レベルのチェックリスト（案）

<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000065583>

技術ロードマップ（案）

<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000065584>

クラウド・コンピューティングと日本の競争力に関する研究会

第1回【平成21年7月22日】

議事要旨 <http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004603/index01.html>

配付資料 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g90722aj.html>

第2回【平成21年10月30日】

議事要旨 <http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004603/index02.html>

配付資料 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g91030bj.html>

第3回【平成21年12月25日】

議事要旨 <http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004603/index03.html>

配付資料 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g91225cj.html>

第4回【平成22年3月26日】

議事要旨 <http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004603/index04.html>

配付資料 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g100326b.html>

2.「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」

報告の公表 総務省・文部科学省同時発表 平成22年6月28日

<http://www.meti.go.jp/press/20100628008/20100628008.html>

本件の概要

総務省、文部科学省及び経済産業省は、平成22年3月17日から「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」を開催し、デジ

タル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に向けた検討を行ってまいりました。 今般、「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」報告が取りまとめられましたので、公表します。

担当 商務情報政策局 文化情報関連産業課

発表資料名

「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」報告の公表

<http://www.meti.go.jp/press/20100628008/20100628008-1.pdf>

デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会報告

<http://www.meti.go.jp/press/20100628008/20100628008-2.pdf>

1. 経緯

総務省、文部科学省及び経済産業省は、デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に向けた検討を行うため、平成22年3月17日から「デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」を開催してきました。 今般、計3回の当該懇談会並びにその下に設置された計6回の「出版物の利活用の在り方に関するワーキングチーム」及び計7回の「技術に関するワーキングチーム」における検討結果を踏まえ、報告が取りまとめられました。

本懇談会の議事概要及び配付資料等については、以下のURLをご参照ください。

http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/k_8.html

(本発表資料のお問い合わせ先)

経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課長信谷

担当者： 高柳、木本、新井

電話： 03-3501-9537 (直通)

総務省情報流通行政局情報流通振興課長安藤

担当： 松田、中野、小澤

電話： 03-5253-5748 (直通)

文化庁長官官房著作権課長永山

担当： 壹貫田、生田、渡辺

電話： 03-5253-4111 (内線2982)

デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会

(第3回) - 配付資料

日時 平成22年6月22日(火)

<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g100622aj.html>

議事次第 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g100622a00j.pdf>

資料1 高井構成員提出資料(日本の書店発の電子書籍流通)

<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g100622a01j.pdf>

資料2 デジタル・ネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会報告(案) <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g100622a02j.pdf>

参考資料 構成員名簿 <http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g100622a03j.pdf>

第1回【平成22年3月17日】 配付資料

<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g100317aj.html>

第2回【平成22年6月8日】 配付資料

<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/data/g100608fj.html>

3. 「所有から利用へ」の世界を支えるクラウド・コンピューティングの可能性

科学技術動向研究

科学技術動向 2010 年6 月号

<http://www.nistep.go.jp/achiev/ftx/jpn/stfc/stt111j/report1.pdf>

科学技術政策研究所 黒川利明 客員研究官

日高一義 客員研究官

「クラウド」という言葉は、英語の雲（cloud）から来ている。クラウド・コンピューティングは、インターネットを基盤にした情報処理を指し、インターネットを雲の形で書き記す。すなわち、各種の計算、情報通信処理を、手元の計算装置ではなく、雲の向こうのクラウド・センターにある計算資源を使って行い、手元の端末に表示することを指す。クラウド・コンピューティングは、コンピュータのバッチ利用、リモート処理、時分割処理、パーソナル・コンピューティング、クライアント・サーバーなどと言った利用形態あるいは利用システムの延長にある。広い意味では、ICT 技術の進展とインターネットの浸透による、個人の生活、企業の活動、社会の制度などの大きな変化を支える、近未来のIT 技術とその活用全般をクラウド・コンピューティングと呼ぶこともある。そのために、単に「クラウド」と言っても、クラウド・コンピューティングのどのような側面を指すか、また、どのような立場で考えるかによって、多様な解釈があり得る。細かい定義に関しては議論が分かれ、識者の間でも意見の不一致が見られる。

4. 消費者向け電子商取引実態調査の実施と結果の公表

平成22年6月11日

～我が国初！「消費者向け電子商取引」の産業構造を明らかにする統計調査を実施～

調査統計部 産業統計室

<http://www.meti.go.jp/press/20100611002/20100611002.html>

経済産業省は、消費者に対しインターネットを通じて物品・デジタルコンテンツの販売やサービスの提供を行う「消費者向け電子商取引」の産業構造を明らかにすることを目的として、我が国で初めての統計調査を実施しましたので、その結果について、お知らせします。

<http://www.meti.go.jp/press/20100611002/20100611002-1.pdf>

消費者向け電子商取引実態調査結果 概要(PDF形式: 156KB)

<http://www.meti.go.jp/press/20100611002/20100611002-2.pdf>

消費者向け電子商取引実態調査結果 本文(PDF形式: 723KB)

<http://www.meti.go.jp/press/20100611002/20100611002-3.pdf>

1. 消費者向け電子商取引実態調査とは

本調査は、消費者に対しインターネットを通じて物品・デジタルコンテンツ

の販売やサービスの提供を行う「消費者向け電子商取引」の産業構造を明らかにすることを目的として、消費者向けに電子商取引を行っている事業者を対象に行った統計調査です。

2. 調査項目

本調査では、以下の項目について調査を行っております。

- ①商品ごとの消費者向け電子商取引売上高
- ②消費者からみたインターネット販売の利用方法（支払い時における決済方法、物品の受け取り方法、購入する際に利用した端末機器）
- ③消費者向け電子商取引の分野に参入した時期
- ④インターネット上に店舗している店舗の形態（電子モールへの出店状況等）等

3. 平成21年調査の結果概要

（1）事業者数と消費者向け電子商取引売上高の関係をみると、

① 事業者数の分布については、「消費者向け電子商取引売上高が3千万円未満の事業者」が事業者数全体の約8割を占めていることが分かりました（図1）。

② 売上高の分布については、「消費者向け電子商取引売上高が10億円以上の事業者」が消費者向け電子商取引売上高全体の約8割を占めることが分かりました（図2）。

（2）消費者向け電子商取引の分野に参入した時期をみると、平成16年以降に急激に増加していることが分かりました（図3）。

（本発表資料のお問い合わせ先）

経済産業政策局 調査統計部 産業統計室長 今井 洋夫

担当者：川口 孝男

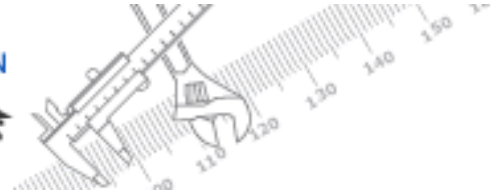
電話：03-3501-1511（内線2897）

03-3501-0386（直通）



Student Formula SAE Competition of JAPAN

全日本 学生フォーミュラ大会



報告

7月後半からの試験期間も終わり、KARTは活動を再開しました。今回は、8月12日に行われましたオープンキャンパスでの様子と、当チームの特色のひとつでもあるカーボン製品の焼き上げについてお伝えします。

オープンキャンパス

8月12日、KARTメンバーの大半が所属する物理工学科にてオープンキャンパスが行われました。将来の京大生に大学ではどのようなことをしているのかを伝えるこの行事で、KARTも、機械システム学コースの展示スペースを一部お借りして昨年度車両YJ-R07の展示を行いました。また、並行して今年度車両YJ-R08の走行動画を上映しました。

来場した高校生の皆さんは、初めて見る学生フォーミュラの車両に興味津々といった様子で、すぐに人だかりができました。機械システム学コースの見学に来る生徒さんには、やはりというべきか「クルマが好き」という方も多く、こちらか



ら話しかけると楽しそうに話をしてくれました。 また、周りに集まってくれた方々にも、展示車両の仕組みや、KARTでは大学の講義で扱うどのようなことが生かされるのか、またこの活動を通じてどのようなことを体験、学習できるのかについても説明を行いました。

各研究室で行われる研究とはまた一味違った活動に多くの人に興味を持ってもらえたのは非常に嬉しいことでした。

カーボン製品鋭意製作中

大会まで残り1ヶ月を切りました。 現在、KARTでは大会に向けてマシンの最終調整に入るとともに、カーボン製品の製作が大詰めを迎えています。 もっとも大きな、そして最も目立つカウルの他にもいくつかカーボンを採用した製品を製作しています。 写真はカーボンステアリングです。独自にステアリングを製作することで、自由度が高まるため、大きさや形状を使いやすいようにでき、さらに表示機器の一部を移植することができるようになります。

また、カウルもすでにカーボンやハニカム層の積層に入っており、焼き上げまですでに秒読み段階に入っているといっても過言ではありません。 今月末、あるいは来月の初めには焼きあがったカウルを装着しての走行練習を行う予定です。

